

女性インストラクター雑感

三輪 紅

男性と女性で上達度に差が出ると思えば、それは決して性差が原因ではなく、指導する側が持つ性差意識が問題なのではないでしょうか。

スキーとカヌーのインストラクターをして十年になります。この仕事は、ほとんど男女差なく、個人の能力を発揮することができ、努力すればそれなりの結果を出すことのできる、大変やりがいのあるものです。

女性インストラクターの役割

特にレッスンに関しては、女性インストラクターのほうがよいと言われるお客様も多くなってきました。以前は女性インストラクターは初心者や子どもを担当するもの、と決めつけて、女性に習うことを嫌がる中・上級者もいました。最近はそのようなことはめったにありません。むしろ、いかにもスポーツマンという体格の男性でなくとも、これぐらいのことができるのだなと思っただけ、身近な目標になりやすいようです。また女性だと、男性と同じように厳しくレッスンしていてもソフトに感じられるようで、得をしている部分もあります。

筋力的には、性差があるのももちろんですが、日常のレッスンではそれほど困ることはありません。自分より体の大きい人を背負って雪山を滑った

り、急流で流される人を救助するときには力があるほうがよいでしょうが、ある程度は技術でカバーすることができるとは思います。

お客様の性別によって指導のペースを変えることはありませんが、それも筋力差のためで、それぞれの方に応じたレッスンをすれば上達に男女差はないと思います。指導する側が限界を作ってしまったら、お客様はどんどん上達されず。もし、性別で上達に差が出るのであれば、それは性差ではなくインストラクターの性差意識が原因なのではないでしょうか。このような意識を変えていくには、まず女性インストラクターが性差がないことを示していくことが必要でしょう。実際、肩ひじはらずにいきいきと働く多くの女性インストラクターが、少しずつ周囲の意識を変化させてきています。

仕事・結婚・出産

この十年で、女性インストラクターは数が増えてレベルも向上し、それとともに女性にとっても働きやすい環境になってきましたが、まったく問題がないわけではありません。

スキーやカヌーの指導をするには、練習場に近いところにいなければなりません。そのため、結婚や出産が大きな問題になります。私も結婚してから

は、冬は単身赴任をしています。他の女性インストラクターがすべて、それができる環境にあるとは限りません。さらに、妊娠・出産となると、現状では仕事を続けることは、ほとんど不可能です。出産後も、職場には託児施設はなく、保育園に預けるにも勤務時間

や休日が不規則なため、地元に住み、育児を担ってくれる人が家庭内にいなければ、復帰することはできません。このような状況で、ほとんどの女性インストラクターが、結婚か出産を機に仕事をやめていきます。

将来にむけて

しかし、結婚や出産、育児の経験はさまざまなお客様を理解して接することが要求されるインストラクターの仕事にとって、とてもプラスになるはず。女性インストラクターが、仕事を続けるかどうかを自分の意志で選びとれるような環境が完全に整うには、まだ時間がかかるでしょうが、少しずつ理想的な環境に近くなるよう、まず私ができるところから、仕事もプライベートも大切にしていきたいと思えます。そうすることで、もっと若い女性インストラクターたちがさらに自由に将来のヴィジョンを描けるようになるのではないのでしょうか。



カヌーの指導をする三輪さん(左)

へみわ・くれない)WSFジャパン会
員、(株)日本職業スキー教師協会公認・
志賀パレスプロスキー学校インストラ
クター、カヌーインストラクター